総　　評

＜特に評価の高い点＞

１、「子どもの主体的な活動を促す環境と援助」

園のグラウンドには、ログアスレチック、ブランコ、雲梯、登り棒、砂場などを設置しています。又、グラウンドにある栗の木の栗を拾ったり、隣接する広い畑で野菜の世話をするなどして、自然に触れています。保育室ごとに玩具の特徴を活かして、子どもが自分で選んで遊べるよう積み木、ままごと、絵本などのコーナーに分かれています。このように、屋外や園内で子どもが自発的に遊べるよう環境を整備しています。

一人ひとりの子どもの成長に合わせて遊びが一歩先へ展開できるように援助しているので、子どもは折り紙遊びから切り紙遊びへ挑戦します。また、子どもの自信につながるさまざまな工夫の導入など、子どもの興味・関心にそった遊びへいざなっています。

子どもたちが共に生活したり遊んだりする中で、自然に年下の子が年上の子どもに対して憧れを持ち、また、年上の子は自分より年下の子どもへの思いやりの気持ちを感じている姿がみられます。こうした子ども同士のかかわり合いを通して、自ら生活や遊びを展開し、育ち合っていけるように、子どもの主体的な活動を促しています。

２、「食農育と安心安全な給食」

グラウンドに隣接した広い畑で、子どもたちはたくさんの野菜をお世話して育て、収穫し、クッキングや給食で食べる「食農育」という貴重な体験をしています。９月中旬には、給食の半年分の食材になるジャガイモ掘りと収穫感謝祭を、また別の日には枝豆がたわわに実る大きな枝を、用務員が子どもの待つ栗の木の下へ何度も運んでいました。ふっくらとした枝豆のさやを、小さな手がつぎつぎともいで、収穫かごをいっぱいにしていきます。年長さんは、散歩車の中で日向ぼっこしている乳児さんにも、小さな枝についた枝豆を差し出していました。保育士も援助して乳児さんも枝豆収穫です。このように、季節ごとに収穫される何種類もの野菜は、「自分で採ったお野菜」として子どもたちが自ら料理したり、給食の食材として好き嫌いなく食します。自分で採らなかった野菜は、お友達が収穫した野菜たちです。

この他、毎年、発寒川を遡上する鮭を見学するところから始め、子どもたちみ

んなで作る「ひかり鍋（石狩鍋)」クッキングという行事があります。子どもたちの目の前で大きな鮭がさばかれ、食べ物の命を「いただいて」生かされていることに感謝しながらホールで子どもたちみんなでおいしく食べています。

給食は、無添加の食材・調味料、無農薬米や低農薬の果物、国産・地産の食材にこだわり、子どもたちの食の安全を確保しています。旬の食材を使った献立、園の畑で収穫した野菜のバイキングなどの行事食、郷土料理等、おいしく安心できる食事を提供しています。

３、「0 歳からの異年齢保育と研究実践報告」

事業所は、1998 年より異年齢保育を実践し、異年齢の子ども同士の育ち合いを保障してきました。事業所・法人は、より広範な地域ニーズを、核家族・少子化や遊びの質の変化等による異年齢子ども集団の喪失状況からの回復の必要性と捉え、このような地域社会における子育て環境の危機に対処するためには、異年齢保育の充実が不可欠であるとの信念を持っています。

従来からの異年齢保育に加えて、2015 年度より 0 歳児産休明けからの異年齢保育を始めています。異年齢保育の研究・実践は、日本保育学会やその他の学会・研究会等で発表し、成果物である報告書を保護者やその他の保育園はじめ保育士養成校・子育てに関わる団体・小中学校等へ寄贈、ホームページにも公表して異年齢保育実践の啓発と普及に努めています。より良い保育実践を自園だけに留めず、広く発信続けてきたことは、「子どもの最善の利益」を保障すると共に子どもの福祉の向上に貢献するものともいえます。

４、「安全管理の組織的取組と子どもの『安全行動能力』の育成」

園では、「安全委員会」と「安全管理委員会」を設置して相互に連携しながら安全体制を整えています。「安全委員会」は、保育園職員・法人役員・保護者の三者で構成され、2018 年度は交通ルールについて情報交換し、保護者への注意喚起と子どもたちへの交通安全指導を実施しました。「安全管理委員会」は、園の職員がリスクマネジメントに関する改善策や予防策などの話し合いを行っています。

その結果、「安全管理マニュアル」が毎年改訂されており、大変充実したもの

になっています。

2017 年の 4 歳児の骨折事故を教訓に、子どもの「安全行動能力」の育成の取組をさらに深めるために、事故の原因を総合的な観点から分析し、対策をまとめました。それを、2018 度の札幌市私立保育園連盟の研究大会で発表しています。ここでも自園だけでなく、保育界全体への貢献が意識されています。

＜更なる質の向上のために求められる点＞

「効果的な記録と保育の充実」

園では、異年齢保育を編成しているため年齢別指導計画と異年齢保育指導計画を作成しています。月と期ごとに評価、反省を行いカリキュラム会議、保育会議で話し合い次月の指導計画につなげています。職務分担表で主任、副主任、リーダーの役割を明確にして計画、実践、評価、改善を図れるように、組織的な体制となっています。

0 歳からの異年齢保育と家庭的な保育に重きをおいているので、職員は、記録に関しても、日誌、週案にしばられないトータルに考えた話し合いをしています。つまり、記録を簡素化して業務負担を軽減して、子どもと向き合う保育の時間を大切にしようとしています。今後も引き続き、保育士の記録業務や各計画記載時の効率化、計画様式の簡易化などにより、保育実践の時間が充実することを期待します。